

1月6日 詩編23編

【解説と黙想】

主は羊飼

詩編23編には祈りは含まれず、助けを得るための嘆きの訴えも含まれず、ただ純粹な感謝だけが含まれている。主が羊飼として詩人を世話し、守り、導いてくださることへの感謝と平安に満ちている。

1節で「主は羊飼、わたしには何も欠けることがない」と詩人は断言する。神を牧者にたとえることは、同時に人間を羊にたとえることを意味する。羊は弱く、他の獣に対する自己防衛力を持たず、地理的な分別力に乏しく迷い易い動物である。ゆえに、羊飼いに全面的に信頼して従うより他に生きる道はない。私たち人間も神に依存しなければ生きていけないという点で、羊と同じような存在である。「わたしには何も欠けることがない」とは、現在も将来も主の養いを信じる素直な表現である。

2節に「主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い」と歌われている。パレスチナにおいて放牧地と言えば、水の乏しい砂漠のような荒れ野である。そのような所では、牧草と水は優れた牧者によってのみ探し当てられる。か弱い羊の命は牧者にかかっており、牧者なしには飢えと渇きと猛獣の危険からの保証はない。

4節には、「死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる」とある。「災いを恐れない」とは、「災いがない」という意味ではなく、「たとえ災いが襲いかかって来

ても恐れることはない」という意味である。その理由は「あなたがわたしと共にいてくださる」からである。この句が詩編23編の中心聖句である。日々の生活の中で苦難や危険に直面してもそこに恐れがないという信仰は、主の臨在こそ救いであることへの確信から来るのである。

5節より客人をもてなす主人の比喩に表現が変わる。主なる神は敵から詩人を保護するだけでなく、豊かな料理や酒を取り揃えてもてなし、歓迎と親密さを示す。主人が客人の頭に「香油」を注ぐことは喜びの表現であり、「杯」は気前良く客人をもてなす様子を示している。これは、主に信頼する者の人生が常に恵みで満たされ、溢れるほどであるという感謝の表現である。

6節は、羊が安全な囲いの中に守られるように、主に従う者は「主の家」に住むことができ、休息と平安が与えられることを示す。「主の家」とは、ダビデにとってはエルサレムの主の家であり、キリスト者にとってはイエスを頭とする教会である。

このように、詩編23編は「主はわたしの羊飼」と歌い、その主が「わたしと共にいてくださる」と歌うが、イエスこそが「わたしと共にいてくださる羊飼（主）」なのである（エゼキエル34章、ヨハネ10：1～18）。それが、イエス・キリストが「インマヌエル（神は我々と共におられる）」と呼ばれるゆえんである。（小澤寿輔）

《参照箇所》 エゼキエル書34章、ヨハネによる福音書10章1～18節

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問16、93

1月6日 詩編23編

【説教展開例】

主は羊飼

◇..... 単元のねらい◇

神は私たちの命とすべての善きものの源であり、神の子たちに必要なすべてのものを与えて、楽しむことができるように祝福して下さることを学び、この恵みの神に日々より頼んで歩むことができるように祈り求めることを身に着けさせたい。1節から6節まですべてが重みを感じさせるが、今回は1節、2節、4節を重点的にお話しすることにする。

「主はわたしの羊飼

新年あけましておめでとうございます。今日は、今年に入って最初の教会学校の主日礼拝を捧げています。今年一年も、聖書の御言葉をよく聴いて、神様を喜び、神様に喜ばれる一年を過ごしたいと思います。

皆さんは、何か良くないことが起これば、「運が悪いからだ」と思ったり、逆に何か良いことがあれば、「ラッキー、運が良い」と思ったりすることはないでしょうか。また、自分の身に良いことが起こるかどうかわかりたくて占いを気にしたりすることはないでしょうか。まことの神様を信じている僕たち私たちは、そのようなことを心配する必要はありません。なぜなら、イエス・キリストの父なる神様は、神様の子どもである私たちを愛し、いつも守って下さるからです。また、私たちに必要なすべてのものを与えて楽しむことができるように祝福して下さるからです。そのことをよく教えてくれる聖書の言葉があります。それが先ほど読んだ詩編23編です。

この詩の一番初めのところで、「主は羊飼、わたしには何も欠けることがない」と、この詩を歌った人（詩人）は言います。神様が羊飼いで、人間が羊であるという考

えは古くからありました。羊はとても弱く、獣が襲って来ても戦うことはできません。また、方向音痴なのですぐに道に迷ってしまいます。自分で食べるものや飲み水を見つけることもできません。これでは、羊だけではとても生きていけません。羊飼いの導きに全面的に信頼して従うより他に生きる道はありません。私たち人間はどうでしょう。私たちも、神様の守りと、お導きと、生きるために必要なすべてのものを与えて養って下さることがなければ、生きていけません。まるで羊みたいですね。今日の詩編の詩人は、「わたしには何も欠けることがない」と言いました。今も将来も最高の羊飼である神様の守りと養いを信じて、そのように言ったのでした。

2節には、「主はわたしを青草の原に休ませ／憩いの水のほとりに伴い」とあります。「青草の原に休ませ」と読むとき、日本に住んでいる僕たち私たちは、柔らかい草が一面青々と生えている牧場を想像するかもしれません。けれども、この詩が書かれたパレスチナという所では、羊の放牧地と言えば、岩がゴロゴロ転がっていて、水の乏しい砂漠のような荒れ野です。そのよ

うな所で、羊が牧草と水にありつくためには、優れた牧者に見つけてもらい、そこに導いてもらうより他ありません。導かれて岩と岩の間をよく見ると、緑の草が2～3本生えています。空気中に含まれる水蒸気が夜になると岩の表面に結露して水滴となり、それが地面にポタッと垂れると、そこだけ土が潤されて草が生えます。羊たちにとっては、たった一口分の草です。羊たちはその一口分の草を食べては進み、また一口食べて進み、ということを一日中続けると、やがてお腹いっぱいになります。

神様は、人間である私たちにも、毎日少しずつ、その日に十分な恵みを与えて、生かしてください。もし、いっぺんに広くて一面緑の牧草を私たちに見せてしまったら、どうでしょう。私たちは神様にお祈りすることも、神様に頼ることも、感謝することも忘れて、神様から離れて生きてしまいます。羊が羊飼いから離れてしまったら、生きられませんね。それと同じで、私たちも神様から離れてしまつては、一日たりとも生きていくことはできません。だから神様は、一日に必要な分だけを与えてくださり、また次の日には、その日に必要な分だけを与えてくださるのです。このようにして、神様は私たちの命を支えてくださるのです。ですから、人生の先が見えなくても心配する必要はないのです。ただ、私たちのすべての必要を知って与えてくださる神様に信頼して、神様のお導きにお従いすればよいのです。

4節には、「死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。」とあります。「災いを恐れない」とは、「災いがない」という意味ではありません。そうではなくて、「たとえ災いが襲いかかって来ても恐れることがない」という意味です。どうしてそのように言えるのでしょうか。神様が「わたしと共にいてくださる」からだ、この詩人は言っています。この言葉は、詩編23編の中で一番中心的な言葉です。日々の生活の中で苦しいことや困ったこと、危険なことがあっても、神様がわたしと共にいてくださるから怖くないのです。

それでは、「あなたがわたしと共にいてくださる」と言われるその方とは、いったいどなたなのでしょう。新約聖書のヨハネによる福音書10章11節を見ると、「わたしは良い羊飼いである」と言われた方がいらっしゃる。どなたでしょう。そうです、イエス様です。また、旧約の預言者イザヤも次のように言いました。「見よ、おとめが身ごもつて、男の子を産み／その名をインマヌエルと呼ぶ。」それと同じ言葉が、今度は、イエス様のお生まれになる前に、天使によってヨセフに語られました。もうみんな分かったと思うけど、イエス様こそが「インマヌエル（神は我らと共におられる）」と呼ばれる私たちの羊飼いなのです。今年もこの方に信頼し、お従いして、毎日の生活を恵みと喜びと感謝で満たしていただきましょう。（小澤寿輔）

《今週の暗唱聖句》

死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。（詩編23編4節）

1月6日 詩編23編

【幼稚科】

主は羊飼

〈ねらい〉

私たちの羊飼である神さまは、いつも私たちを養い導いて下さることを覚える。

〈展開例〉

新しい年になりました。今年も神さまはどんな方かを一緒に知っていきましょう。

さて、皆さんは羊を見たことがありますか？ 羊は弱くて、他の強い動物から自分を守るやり方も力も持っていないで、道にも迷いやすいようです。判断する力も弱く、牧草や水がある場所を探す力もない弱い動物のようです。ですので、羊を世話して守り、導いてくれる羊飼いさんがいなくては生きていけないのです。

みんなも、まだ育ててくれるお父さんやお母さんがいなくては生きていけないように、色々できることがいっぱいあるみんなのお父さんお母さんも先生たちも、本当は神さまがいなくて生きていけないのです。だから、神さまは私たちが羊にたとえました。ですから羊飼いは神さまなのです。

神さまは羊である弱くて迷いやすくてかしくない私たちをお世話し、休ませ、守り、導いてくださる方です。「魂を生き返らせてくださる」すばらしい方なのです。

だから、この詩編を書いた人は言います。

今もこれからも、どんなことがあっても神さまが私たちを育て導いてくださるから、「わたしには何もかけることがない」と！たとえ、大変なことがあっても、こわがらなくていい。神さまがいつもわたしと一緒にいて、正しい道に導いてくださるから！この詩人は、本当にそうだ！と確信して語っています。そして、羊飼、主人である神さまにいつも聞いて頼ってついて行く人の人生は、神さまの恵みでいつも満たされ、本当に祝福でいっぱいになるなあ、と心から感謝しています。

これからもこの詩編を書いた人のように、神さまと離れず、神さまの家である教会に通い続け、神さまの家族と一緒にすばらしい神さまを賛美し続けましょう。

〈祈り〉

神さま、わたしといつも一緒にいて、導いてくださってありがとうございます。これからももっと、神さまのことを頼って何でも聞いていけるようにさせてください。

〈やってみよう〉

羊たちと羊飼いの絵を描いてみよう。

賛美しよう ♪ハ・ハ・ハレルヤ♪

